

Contents

特集：米大統領選の三択問題	1p
＜今週の”The Economist”誌から＞	
”Only in America” 「アメリカならでは」	7p
＜From the Editor＞ フィラデルフィア美術館	8p

特集：米大統領選の三択問題

4月22日、今となっては残り少なくなった大票田、ペンシルバニア州の予備選挙が行われました。結果はヒラリー・クリントン上院議員の勝利。バラク・オバマ上院議員との民主党内の死闘はまだまだ続くことになりそうです。

それにしても、ジョン・マッケイン上院議員を合わせた3人の候補者は、実に見事な対比をなしています。米国の有権者は、今しばらく「三つ巴」レースを楽しむつもりなのかもしれません。さて、次期米大統領の「三択問題」はどう考えるべきなのでしょう。

ペンシルバニア = Keystone 州の決断

全米50州はそれぞれに「名乗り」がついているが、ペンシルバニア州の別名は”Keystone States”である。米国史の出発点である東部13州の地図を思い起こせば、中央に位置するペンシルバニアはなるほど「要石」に見える。ニューヨークとワシントンDCの中間に位置し、かつてはフィラデルフィアに首都が置かれていた時期もある。独立宣言や合衆国憲法が生み出されたのも、南北戦争の激戦地ゲティスバーグを擁するのもこの州である。鉄の街、ピッツバーグなど、製造業の要所でもある。

人口で全米第6位のこの州は、代表的な Swing States でもある。つまり選挙のたびに共和党と民主党が拮抗する。東のフィラデルフィア、西のピッツバーグという2大都市は、政治的にリベラルである。が、「その中間にはアラバマがある」(民主党系選挙参謀、ジェームズ・カービル)といわれるほど、保守的な気風を有する州でもある。映画『ディア・ハンター』の舞台といえば、分かりやすいだろうか。

2000年選挙では、共和党はフィラデルフィアで党大会を行った。が、この年にペンシルバニア州が選出したのはアル・ゴアの方であった。その後のブッシュ大統領は、同州の支持獲得をもくろんで、2002年に鉄鋼セーフガードを発動している。五大湖沿岸から大西洋沿岸中部に広がる「ラストベルト」(斜陽化した重工業地域)には Swing States が多く、この地域の動向が毎回、選挙戦の動向を左右するからだ。しかし2004年の選挙では、同州は再び僅差でジョン・ケリー上院議員を選出している。

2008年の選挙においても、ペンシルバニア州が持つ意味は大きいものになるだろう。民主党の指名を争う二人の候補者にとっても、4月22日前後は他州で予備選挙の日程がなかったこともあり、あらためて当地の戦いが脚光を浴びることになった。特に劣勢のヒラリー陣営としては、「重要戦略州で勝てるのは自分の方」であることをアピールして、Super Delegates の支持拡大を狙いたい事情があった。

それというのも、ここへ来てオバマ陣営には不運が続いている。まず、過去20年間にわたってオバマの精神的指導者であったジェレマイア・ライト牧師が、過激な人種差別批判発言でメディアの耳目を集める。支持者離れを食い止めるべく、オバマは3月18日にフィラデルフィアで人種問題をテーマに“A more perfect union”と題する講演を行なう¹。が、この後も「師匠」の過激発言は止まらず、4月29日には絶縁宣言を余儀なくされる。

オバマにはめずらしく「失言」も飛び出した。4月6日、カリフォルニア州での非公開の会合で、「ペンシルベニアの田舎町では、失業に苦しんだ結果、人々が社会に怒りを持ち、銃や宗教に執着している」と言ったもので、これでは「アラバマ」に喧嘩を売ったも同然である。発言の映像が、ユーチューブに載らなかったのはせめてもの僥倖といえよう。

結局、ペンシルバニア州の結果は事前の予想通りヒラリーの勝利で、その差は55%対45%であった。「ヒラリーは10P以上の差をつけたい」、「オバマは一ケタ台の差に詰め寄りたい」という状況であったために、まことに微妙な数値であった。

とはいえ、選挙結果が意味するところは明白であり、「ヒラリーとオバマの間では、まだまだ消耗戦が続く」ことになる。次の焦点は、5月6日に予定されているノースカロライナ州およびインディアナ州の予備選挙となるが、ここで決着がつくことは考えにくい。Keystone州の結果はそれだけ重かったといえる。

「漁夫の利」を得るマッケイン

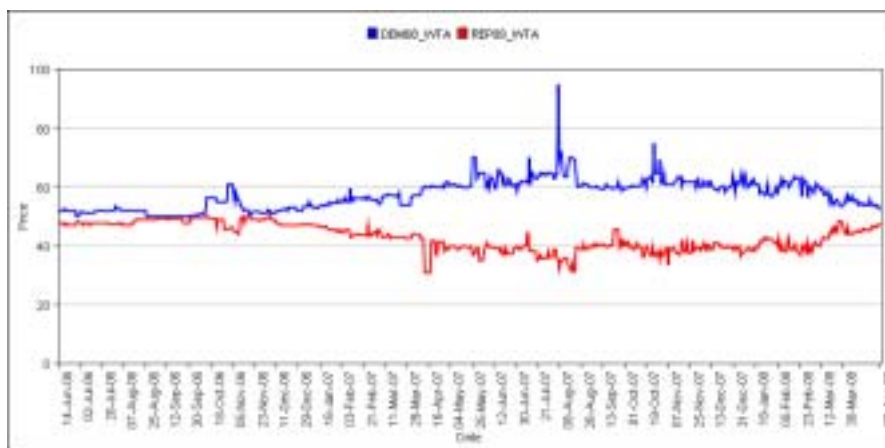
達観していえば、米国民はまだまだ「ヒラリー対オバマ」の戦いを楽しみたいのかもしれない。この勝負が終わった瞬間に、今度は「民主党対マッケイン(共和党)」という戦いが始まることになるが、その楽しみは先にとっておいてもいい。むしろ「最後まで続く予備選挙」というものを一度見てみたい。そんな気分があるのではないだろうか。

¹ <http://jp.youtube.com/watch?v=pWe7wTVbLUU> 歴史的な演説との呼び声が高い。

あらためて考えてみると、ヒラリー対オバマの対立は実に面白い。「女性対男性」「白人対黒人」「エスタブリッシュメント対新人」「ディベートの名手対演説の名手」「政策通対選挙の達人」「60年代世代対80年代世代」など、いろいろな意味で好対照をなしている。

が、楽しんでばかりはいられない。この間に興味深い現象が起きている。毎度おなじみ、アイオワ電子市場を見ると、「民主党勝利対共和党勝利」の比率は2月まで6対4くらいで安定したものが、4月になって急接近している²。

IEM 2008 U.S. Presidential Election Market



要するに、民主党の両候補が泥仕合を演じている間に、共和党候補が勝利する確率が急上昇していたのである。金融誌『バロンズ』の報道によれば、ファンドマネージャーの57%が「マッケインは予備選に疲れたオバマを破る」と予測しており、それが新たな株高の材料になるという奇妙な現象が起きているようだ。

それくらい、民主党両候補の争いは激しいものになっている。「相手側が候補者になったら、本選挙では投票しない(あるいはマッケインに投票する)」という意見も少なくない。なおかつ、ヒラリーとオバマが製造業州で決戦を繰り広げることにより、民主党の経済政策がどんどん保護主義的な方向に向かっているという問題もある。

ところが選挙資金の集まり方を見ると、下記のような大差がついている。これで負けるようでは、民主党支持者はやりきれないだろう。が、2008年の米大統領選挙は、限りなく「三択問題」の様相を呈しているといえる。

3 候補の選挙資金額の推移 (単位: ドル)

	3月	2月	1月	総収入	総支出	手持ち現金	負債
オバマ	41,144,348	55,369,162	36,060,927	234,745,081	183,671,081	51,073,999	662,784
ヒラリー	20,107,968	34,466,631	18,884,127	189,097,053	157,384,855	31,712,197	15,321,562
マッケイン	12,037,287	10,937,453	12,614,907	76,691,826	65,112,112	11,579,713	707,041

² 本稿執筆時点の5月1日現在、0.527対0.473とほとんど紙一重である。

「三択問題」がもたらす結果³

あらためて3人の有力候補者を比較検討してみると、米大統領選挙としてはめずらしいことに全員が上院議員である。年齢は71歳、60歳、46歳と「老・壮・青」がきれいに並ぶ。この3人は「白人男性、白人女性、黒人男性」という組み合わせでもある。米大統領選の歴史上、もっとも多様性に富む選挙とあって差し支えないだろう。

3人の前歴も多種多様である。ジョン・マッケインはベトナム戦争の英雄であり、ヒラリー・クリントンは元ファーストレディであり、バラク・オバマは社会運動家の弁護士である。それぞれ安全保障に強い、政策全般に強い、演説が上手いと特技も分かっている。それぞれに死角もあり、マッケインは高齢、クリントンは「反ヒラリー感情」、そしてオバマは人種問題に不安を抱える。**3人とも見事に「キャラが立った」候補者である。**

通常であれば、二者に絞り込まれるべきところが三者の争いになっている点もユニークである。民主党側ではオバマとヒラリーの間で人気二分され、決着が夏の党大会まで長引く恐れがあり、党内の分裂が不安要素となっている。

今年の11月4日には、おそらく3人のうちの誰かが次期大統領に当選するだろう。そして来年1月20日正午に宣誓式を行い、第44代大統領に就任することになる。その先の米国外交はどう変わるのか、それによって世界はどう動くのか。しばらくはこの話題に興味がないことであろう。

とはいえ、「3人のうち誰が勝てばどんな政策になるか」を論じるには、今はいささか時期尚早である。なんとなれば**各候補が掲げている政策なるものは、現時点ではあくまでも「たたき台」に過ぎない。**夏から秋にかけての選挙戦で、候補者はどのテーマに有権者が反応するかを見定め、政策を練り上げていく。今までのところ、選挙戦はイメージ選挙から個人攻撃に終始しており、具体的な政策を掘り下げる機運に乏しい。

例えば「日本にとっていちばん良い大統領は誰か？」は、この問題に関するFAQの最たるものだが、一概に答えることは難しい。

模範解答は「マッケイン>オバマ>ヒラリー」とされている。マッケインはアジア政策に造詣が深く、アーミテージなどの知日派人脈がその陣営に結集している。オバマの外交政策は未知数ではあるが、ハワイ出身でありインドネシアで暮らしたこともあり、親日派の大統領になる可能性がある。そしてヒラリーは、かつてのビル・クリントン時代がそうであったように、親中派で日本頭越し外交の政権になりそうだ。

とはいえ、見方を変えればこの模範解答は簡単に崩れてしまう。マッケイン政権ではブッシュ時代の親日姿勢が継続される期待があると同時に、対日要求の期待値も高くなる。そして次期政権においては、同盟国に対する要求は確実に増加するだろう。

³ 本章以降の部分は、『東亜』5月号COMPASSに寄稿したものに加筆したもの。

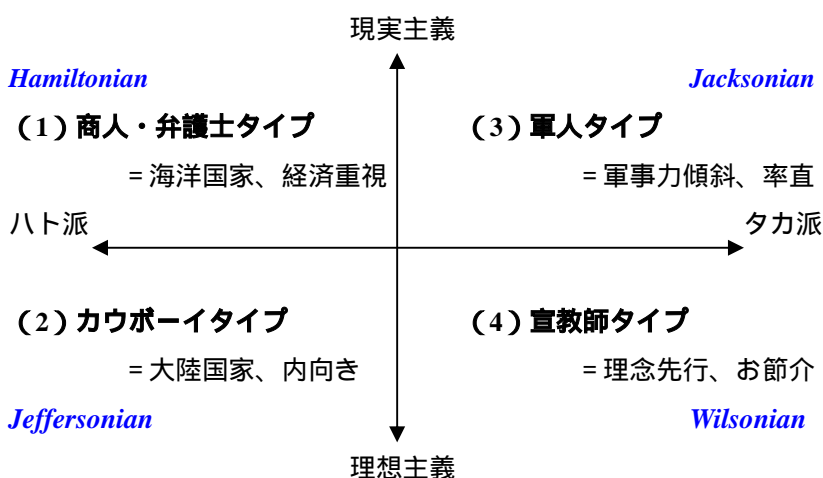
他方、かつてクリントン政権が日本叩きに精を出したのは、米国の貿易赤字の半分が日本向けだった頃の話であり、世界経済における日本のシェアが1割となった現在、次期政権が同様な姿勢をとる必然性は乏しい。また、「中国重視」もよく指摘されるところながら、対中外交が米国にとって重要課題となるのは、次期大統領が誰であっても同じであろう。

「共和党は親日、民主党は反日（もしくは親中）」という図式も、近年になって定着したものであって、けっして固定観念とすべきではない。あらゆる政策で党派色がついている今日の米国政治において、対日政策はめずらしくワシントン内の意見が一致しているテーマである。むしろ、「日本側は民主党政権を嫌う」という態度が見え透いてしまうことで、国益を損なわれることを警戒すべきだろう。

米国外交の3つのタイプへ

むしろ「キャラの立った」3人の候補者について、それぞれの性格を手がかりに次期政権の外交を予測してみると良いかもしれない。多少強引だが、ウォルター・ラッセル・ミードの4類型を使って、それぞれの外交の型を推量してみよう。

米国外交の4分類



ハミルトニアン：海洋国家志向で対外関係に積極的。経済を重視。現実主義的でハト派。スマートだがずるいイメージ（弁護士タイプ）

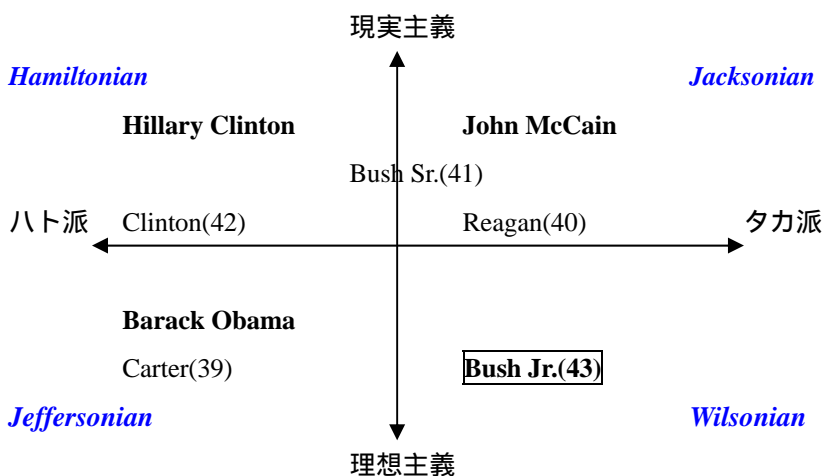
ジェファーソニアン：大陸国家志向で対外関与には選択的。現実主義的でハト派。内向きで純朴なイメージ（カウボーイタイプ）

ジャクソニアン：軍事に傾斜し、国権や国威を重視。現実主義的でタカ派。率直だが問答無用なイメージ（軍人タイプ）

ウィルソニアン：理念的で、米国的価値観を世界に広げることを重視。理想主義的でタカ派。お節介でナイーブなイメージ（宣教師タイプ）

現職のブッシュ大統領は、就任当初はジェファーソニアン的な「慎み深い外交」を標榜していたが、2001年9月11日の同時多発テロ事件を契機にウィルソニアンに転じた。一時は「中東を民主化する」と高らかに宣言したものの、ブッシュ版宣教師外交は中東の複雑な現実の前に沈黙を余儀なくされた。国民の厭戦気分もあり、ウィルソニアン路線はもはや継続不可能であろう。

歴代大統領のポジショニング



マッケインはジャクソニアン・タイプとなる。その言辞はときに好戦的であり、イラクでは「百年でも駐留する」とし、ロシアやイランに対する強硬姿勢も目立つ。とはいえ、大統領になればかつてのレーガン政権のように、分かりやすい大言壮語を振りまくわりには、現実的な安全保障政策となるのではないか。

ヒラリーはその配偶者と同様にハミルトニアン・タイプであろう。弁護士的な交渉スタイルで外交問題に当たるが、基本的に軍事力の行使には慎重である。ビル・クリントン時代のスタッフが大量に残っていることもあり、予測可能性が高い外交となるだろう。

最後にオバマは、その外交姿勢が予測しにくいだが、かつてのカーター大統領のようなジェファーソニアン・タイプとなるのではないか。米国外交はやや内向き化するかもしれないが、得意な演説でどんな新しい理念を打ち出すかが楽しみである。

3人のうち誰が次期大統領になるにせよ、米国外交の路線は現状から大きく変化するだろう。ただしその変化は、われわれの意表を突くほどではなく、「かつて見た」変化のバリエーションの範囲内となる。懼れるほどのこともないが、ないものねだりの期待は失望に終わる。長らく米国政治を見ている者であれば、「ああ、またか」と感じるころかもしれない。

<今週の”The Economist”誌から>

”Only in America”

「アメリカならではの」

Lexington

April 26th 2008

* “Exceptionalism”(例外主義)とは、米国外交史を語る際に必ず出てくるキーワードですが、”The Economist”誌によれば3候補はそれぞれに例外主義を抱えているそうです。

<要約>

米シンクタンク界は今週「例外主義」週間で、AEI、ブルッキングス、マンハッタン研究所の3箇所ですべて『米国理解～例外国の解剖』という分厚い新刊本の議論が行われた。

米国はことのほか、みずからが例外的であると考えたがる。社会の仕組みや根底にある価値観などで他の先進国と違っていると。他国と共通する点が少ないし、富の不平等な配分も目立つ。個人主義やボランティア、愛国心などのサッチャー的価値が根付いている。

米国の例外主義は、1960年代末以降に保守主義運動が勃興してから深まり続けている。現ブッシュ政権は、内政での保守理念と対外的な強引さにおいて、近年におけるもっとも例外主義的政権といえる。問題はこれから、新たなサイクルが始まるのかどうかである。

今のところブッシュ政権への非難は強く、民主党は議会で多数を握り、次期大統領奪還の可能性も高い。ブッシュの不支持率はギャラップ70年の歴史で最も高く、4人中3人近くが米国は間違った方向に向かっていると考え、保守主義運動は集団的な傷心状態にある。

米国民は国民健康保険の導入に賛同している。国際的なイメージ改善にも熱意がある。ヒラリーとオバマが前者を公約し、3候補全員が後者を公約している。次期政権はグアンタナモ閉鎖や環境規制の強化に動くだろうし、そうなれば米国はより近く見えるだろう。

だが2008年選挙を見れば、米国の例外主義はますます強まっているように見える。宗教心を刺激する選挙運動などは、いかにも例外主義的だ。敬虔なメソジストであるというのがヒラリーの売りであり、オバマはライト牧師事件以前に、神によって人生の目的に目覚めたといった。民主党の両候補の方がマッケイン以上に神を語りたがる。

3候補全員が米国式の愛国心を好んで語る。欧州の基準から言うと、武力の行使にも驚くほど積極的だ。マッケインはイラン攻撃に前向きで、オバマは領内での捜査と破壊にパキスタン政府の了解を得ないという。ヒラリーは大統領として、イスラエルへの核攻撃があれば、イランを殲滅することに躊躇しないと発言した。

11月に民主党が大勝利すれば、米国はリベラルになり、医療への関与や環境保護は強まるだろう。だが、それは例外主義的リベラルさとなる。穏健な変化は世界を失望させるだろうが、大統領の権限は議会や司法、州や自治体などによって制限されている。

おそらく、米国の例外主義が終わるのではなく、勝利万能主義が終わる。冷戦の勝利は米国民に力への陶醉を残した。今日ではその気分は大いに変わった。次期大統領の仕事は、勝利万能主義が無責任な孤立主義に取って代わられないようにすることであろう。

< From the Editor > フィラデルフィア美術館

映画『ロッキー』(1976年)の舞台はフィラデルフィアです。予備選の最中に、ヒラリー・クリントンが当地で記者団にこう言ったとか。「私はロッキー。彼なら美術館に登る途中で、この辺でいいやと言うかしら？まだ戦いはこれからだと言うはずよ」。

ロッキーの不屈の闘志にみずからを託すとは、いかにも彼女らしい発言です。「あの一、ロッキーはチャンピオン、アポロとの対決で判定負けするんですけど…」などというツッコミは無粋というものでしょう。何よりあの映画では、シルベスター・スタローンがフィラデルフィア美術館前の正面階段を駆け上がるシーンが印象的です。あれを思い出すと、自分も何事かができるような気がしてくるから不思議なものです。おそらくヒラリーも、耳の奥では勇壮な『ロッキー』のテーマが鳴り響いていたのではないのでしょうか。

ところでフィラデルフィア美術館といえば、現代美術の巨匠マルセル・デュシャンのコレクションを擁することでも有名です。特に「大ガラス」と「遺作」の2点は、20世紀の美術史を語る上で欠かすことの出来ない作品とされています。もっとも両作品は、まともな社会常識を持つ人であれば、「なんだ、これは？」と唖然とするような性質のもの。特に「遺作」は、画集には載せられないといういわくつきの作品です。

知る人ぞ知る話でしょうが、『ロッキー5』(1990年)の幕切れはこの美術館前のシーンです。ボクサーとしての長い戦いを終えたロッキーが、一緒にジョギングをしている息子に「ここに入ったことあるの？」と聞かれて、「いやあ、一回もないよ」と答える。じゃあ入ってみようか、と二人で仲良く初めて(!)美術館に入るとするのがシリーズの大団円でした。二人がデュシャンを見てどう反応したか、想像するとちょっと楽しいですね。

そこで止めておけばいいものを、『ロッキー・ザ・ファイナル』(2007年)を作ってしまうのですから、スタローン(1946年生まれ)も困った人です。ヒラリー(1947年生まれ)もそうですけど、あの世代の人にとってはつとめといひです。オバマ(1961年生まれ)と同世代の筆者(1960年生まれ)は、いささか同情しています。

* 次号は2008年5月16日(金)を予定しています。

編集者敬白

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記までお願いします。

〒107-8655 東京都港区赤坂6-1-20 <http://www.sojitz-soken.com/>

双日総合研究所 吉崎達彦 TEL:(03)5520-2195 FAX:(03)5520-4954

E-MAIL: yoshizaki.tatsuhiko@sea.sojitz.com